

補習校とともに歩んできた道

—AG5との出会い、そしてこれから—

イレレジ羽太礼子 (ボール・ステイト大学 ; JASI 日本語学習サポートグループ)

90年代、私は英語教師を目指して日本で言語教育を学んでいました。縁あって大学卒業と同時に日本語教師としてインディアナ州へ派遣され、そのままこの地で、さまざまな形で教え続けることになりました。気がつけば、30年近く言語教育に携わっています。

私と補習授業校と関わりが始まったのは、今から15年ほど前です。その頃、私が幼い子どもを持つ母として住んでいた大学町では、日本語を学ぶ子供たちのための機会は決して多くありませ

んでした。そこで、外国語を背景に持つ母子が集まり、各国の童謡を教え合ったり、プレイ・グループを作ったりしながら、子供たちに継承言語だけでなく、異なる文化や人に出会う機会を作っていました。

長女が幼稚園年長の歳になり、私たちは車で1時間以上かけて、毎週土曜日に通いました。彼女が補習校に通い始めた頃は、日本企業に務める保護者が日本へ帰国した際、子供たちが日本の学校で学び続けられるようにすることを主な目的としていましたので、我が家の子供たちのように、アメリカで生まれ育った子供たちにとって、そしてその親たちにとっても、多くの努力が必要でした。そうした子供たちは、現地校では英語、家庭では日本語での日常会話、そして補習校では日本の教科書を使った日本語を学んでいました。同じ「日本語を学ぶ子ども」であっても、その背景も、日本語の関係も一人ひとり違います。当時はまだ「継承日本語」

という言葉も十分に理解されておらず、子供たちをどのように支えていけばよいのか、私自身も手探りでした。特に、小学校3年生頃になると、日本語を学ぶ楽しさを失っていく子供たちの姿を多く見るようになりました。そのような親たちも「親のエゴではないか」という罪悪感を分かち合うこともありました。日本語を学ぶことが、ただ日本の学校の勉強についていくためだけのものになってしまっていることに気づいていました。中西部の限られた日本語コミュニティの中で、子供たちの日本語と日本の繋がりをどう育てていくのか、真の日本と世界の橋渡しができる将来の世界人を育てていくか——。それが私自身の課題になっていきました。

保護者として、そして後には補習校の教員として、私たちは教材や活動を試行錯誤しました。しかし、何が正解なのかはわからないまま、一人で奮闘しているように感じることもありました。

そのような時期に知ったのが AG5 でした。2017 年頃だったでしょうか。AG5 では、小学 4 年生の国語「ウナギのなぞを追って」の単元に取り組みました。授業実践に対して、参加された先生方から多くのご助言をいただき、自分の授業を見直し、改善していく上で大きな学びとなりました。しかし、私にとって AG5 で得た最も大きなものは、授業の方法だけではありませんでした。AG5 で私に与えられたもっと大切な恵は同じ志を持ち、子供たちを応援したいという気持ちを共有できる先生方と出会えたことです。

それまで一人で抱えていた悩みを分かち合い、「子供達のためによりよい教育を」という思いを共有できる仲間がいる。そのことが、当時の私にとって何よりの励みでした。AG5 は、私にとって授業を学ぶ場であると同時に、教育者としてのコミュニティーに出会う場でもありました。

そして、子供たち自身からも多くのことを教えてもらいました。

授業中に何か発見した時の輝く表情、日本語で伝わった時の喜び。その姿に励まされながら、学校内で協力してくださる先生方のコラボレーションも生まれました。一人ではできないことも、思いを共有する人がいれば可能になる。その経験は、教育とは決して一人の教師だけで作るものではないことを教えてくれました。

こうした経験を重ねる中で、私は大学で日本語を教えながら、継承日本語教育を研究するようになりました。4人の子供の親として、補習校の教師として、そして日本語教師として歩んできた道が、現在の研究へとつながっています。

研究者として継承日本語教育を学び直してみると、かつて母親たちが子供たちのために行っていた試行錯誤にも、新しい意味が見えてきます。私たちは専門家ではありませんでした。それでも、目の前の子供たちを見て、考え、試し、また考えました。その積み重ねこそが、教育をつくっていくのだと思います。

そして今、私は改めて「言語を教えるとは何か」を考えています。

言語教育は、単に「話せるようになる」「書けるようになる」ための教育ではありません。言葉は、人と人をつなぐものです。言葉を学ぶことによって、自分とは異なる背景を持つ人の考えや気持ちに近づき、自分自身のこともまた見つめ直すことができます。

特に、複数の言語や文化の間で育つ子供たちにとって、言語は自分自身を知るための大切な手がかりでもあります。「自分はどこに属するのか」「自分は何者なのか」と迷うこともあるでしょう。しかし、複数の言語や文化を持つことは、一つに決められないということではなく、複数の世界を理解できる可能性を持つことでもあります。

だからこそ、私は言語教育を通して、子供たちが自分自身のアイデンティティを育み、異なる背景を持つ他者を理解し、世界の中

で一人の人間として他者と共に生きていく力を育てることに貢献したいと思っています。それは、いわば言葉を通して「人間性」を育むことなのかもしれません。

この思いを振り返ると、私自身の原点は、実はもっと遠いところにあることに気づきます。1980 年代後半、小学 5 年生だった私は、「国際理解教室」という授業を受けていました。公立小学校で英語教育が本格的に始まるよりも前の時代で、たまたまそのような取り組みを行う試験校に通っていたのだと思います。普通の教室とは違う特別な空間で外国について学ぶことが、私は大好きでした。英語だと思っていた言葉が、実はスペイン語だったと後になって知ったことは、今でも笑える思い出です。

そして何十年も経った後、AG5 の研修で、その時の先生に再びお会いすることができました。かつては、その先生から国際理解教育を受ける一人の子供だった私が、今では同じ教育の土俵に立ち、

言語教育に携わっています。そのことを思うと、恐縮すると同時に、大きな使命を感じます。自分が受け取ったものを、次の世代へ手渡していく。教育とは、そうした「恩送り」のつながりによって続いていくものなのかもしれません。

現在も、インディアナ州での継承日本語教育には多くの課題があります。まだ十分な体制が整っているわけではありません。それでも、地域の非営利団体や大学、補習校などの理解と協力を得ながら、日本語や日本文化に触れる機会をつくり、保護者同士が励まし合い、子供たちの学びについて一緒に考える活動を続けています。AG5、そして AG+が一つの節目を迎える今、私は自分の歩みを振り返り、そこにあった多くの出会いと学びに改めて感謝しています。補習校を支える一人の母親として始まった小さな試行錯誤は、教師としての実践となり、やがて継承日本語教育を研究する大学教員としての歩みへとつながりました。その道のりは、

最初から計画されていたものではありません。目の前の子供たちのために何ができるのかを考え続けてきた結果です。

そして、その歩みを支えてくれたのは、子供たちの輝きと、同じ志を持つ親や教師仲間とのつながりでした。AG5 で出会った先生方とのつながりは、今も私の大きな支えです。そのご縁と学びを大切にしながら、これからもインディアナ州で、そして継承日本語教育に関わる一人の教師・研究者として、子供たちが言葉を通して自分自身を知り、他者を理解し、世界とつながっていくための教育に、微力ながら力を尽くしていきたいと思います。